誰がために踊る
三代目澤村田之助異聞

火事で小屋が焼けて流れた舞台があってね
そこで杜若が着るはずだった振袖だ
どうだ由坊おまさんならきっとうまくやれる
これで一つ踊ってみねェか

ありがてェおじさんはわたしにとっても神様のような人だ
そのおじさんの踊れなかったものを踊れるなんて願ってもねェことですよ

是非〜お願申します

おじさんが死んだのはオレがまだ三つの時でもちろん記憶にはないが
由坊おいで…
何かとてもまろやかで暖かい
軽い手だけを憶えている
実に見事な縫取りの衣装である

五代目の半四郎という女形は
目千両と呼ばれ
その美貌と芝居のうまさで
あの大南北と供に
何度も当たりを飛ばしてきた
大人物である
踊りのうまさはもちろん
女形でありながら
変化物から立役までこなした
大入
紀伊国屋！

田之助！
大当たり！
オイ あすこ 道具を出すのが 遅ェよ！
芝居が 止まるとこ だったぜ
ヘェ じゃあ もう少し 早く…
頼むぜ まったく
チョン
チョン
チョン
グイッ
キャマ
アァ 田之助さん もう ちょっと…
何だ 今日は 裏の客も 多いなァ

キャー
キャー
ハイ〜ごめんよ
さてその半四郎が踊るはずだった演目を
この田之助が踊るのだ

今の狂言が変わる間に一日かけて

振り写しは五代目の古い弟子と藤間の師匠にたのむ

地方は長唄と竹本の掛合

こちらも死にそうな大師匠が後ろにつく

大太夫の姿を引きずり出す作業は深夜まで続いた

日が昇る

自分は目が冴えて眠れない

一人稽古場で朝を迎えるのはいつものことだ

エ、悪性な
大太夫の当書きは単純なようでいてとても複雑である
おまえはわたしから逃げて行くのか
つらいくるしい

恋しいおまえは
遠いところへ
帰って行く
南北が大太夫のために
書き下した
道成寺物の新しい
大曲だ

紀伊国屋～
大当たり！
若…
はー
はー
はぁ

くそ

ちゅくしょー

冗談じゃねェ

見たぜ

ヨウ田之助

十三代目市村羽左衛門（後の五代目尾上菊五郎）

オヤ

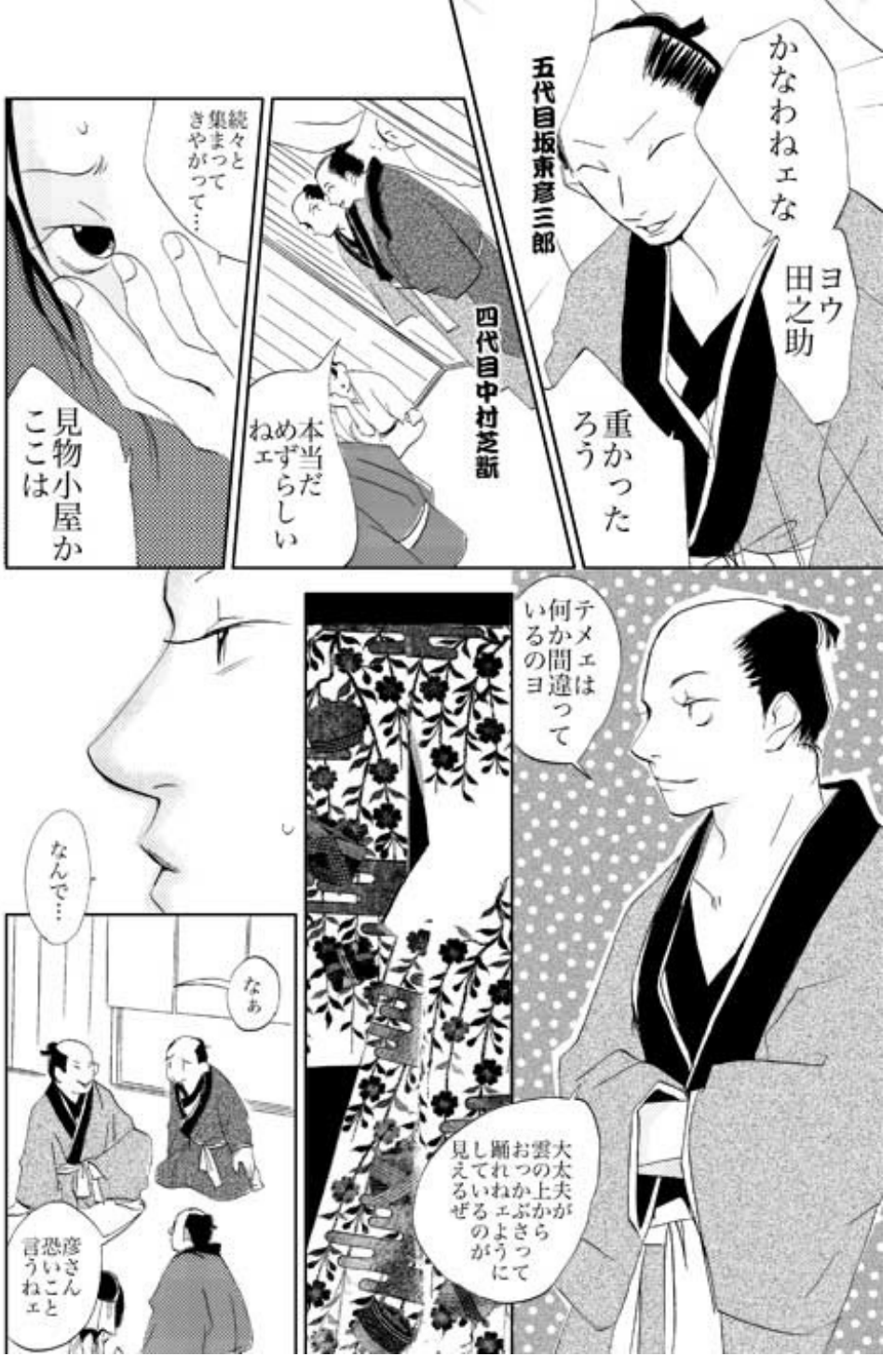
こいつァ驚いた

ばててやがる

オット危ねェ

じじいどもはなんて？

どーせ大太夫にはかなわねェとか何とか言ってやがったろう


五代目坂東彦三郎
ヨウ田之助
かなわねェな
重かったろう
四代目中村芝翫
本当だめずらしいねェ
続々と集まってきやがって…
見物小屋かここは
テメェは何か間違っているのヨ
大太夫が雲の上からおつかぶさって顔れねェように見えるのがしているぜ
なあ
なんで…
彦さん恐いこと言うねェ

なんか ふっきれて ハラくとした 感じかなァ
炬燵にあたって いるような くねくとした 風というのでさ
全然 わかんねェヨ！
田のさん こんにちは
ヤァ お貞ちゃん
どうだった？
さっきの 踊り
……

……
あんまり……
さすが 相政の 娘だ
正直だぜ
あ 田のさん でもとっても キレイだった

さてもう一度大太夫の古い弟子を訪ねる

弟子は歳のせいか気分がすぐれず伏せっているという

どうぞ〜寝間の外からでもかまいません何でも憶えていることを教えてください

女中が困っている

大太夫が田之助に違うと言っている

このままではおじさんの無念もはらせまいよ

若年だと思ってみくびるな！

スッ

あなたは
たいしたお人だ
その気概を
師匠は見たかった
んだねェ
芝居のことで
頭を下げるなんて平気
自分には
親がいないし
それが逆に
他の役者達へ教えを
こう言い訳にもなる
おじさん
この田之助に
あの踊りを託しておくれ

トオン

おじさん？

大和屋のおじさんかい？

おっきくなったなァ由坊

ドッ

キュン♥

エェモ何でこっちを向いてくれねェんだよう

テメェが止めるから帰るに帰れねェヨ

いっそ気がもめるよう

ねェ

憎いお人だねェ

ほれたが悪いか
背中にいるのに
遠いよ…
ハッ
ありがとう
おじさん…

ハァ
ハァ
ヨウ
お貞さん
お急ぎで
どちらへ
どいて
どいて
太夫！

やあ

お貞ちゃん

わかったく？
またあのじいさんのところへ行ってさァ
この踊りの勘どころがわかったよ
いつの間にあんな工夫を？
男は逃げない
ドキン
気がないくせにそばにいるからじれる
蛇になるのは戻りと一緒サァ
ホウラ別れたほうがかえってすっきりする時もあるだろう
田之助さんはどうして女心がそんなにわかるのだろうねェ

あんまりせつなくって泣いてしまったヨ
あーそう？
うん
オイラ今恋してるからなァ
芝居が変わってから一度も参らねェから
今度行く気サ

深川の浄心寺とやら
ふふ
ニヤ
よく拝んでお上げなさいまし
終